

テーマ

学校の部活動から考えるジェンダー

コラム 城西大学経営学部 マネジメント総合学科 教授

山口 理恵子 さん

りぷる

さつぽろ

春

57

2023 Vol.

「部活とジェンダー」にはどんな関りがあるのでしょうか？あまり関係ないと思う方もいるかもしれませんが実はジェンダー意識は部活やスポーツ界の様々な問題・課題とつながりがあります。そうした問題の原因と解決のヒントはどこにあるのか、山口先生にうかがいました。

部活動とジェンダー

城西大学経営学部 マネジメント総合学科

教授

山口

理恵子さん



もし、「部活動の思い出」を1つ挙げてください、と言われたら、真っ先に思い浮かぶのが高校時代に所属していたバスケットボール部で、1年生に課せられていた「監督への弁当作り」だ。練習試合や公式戦のたびに、監督のために弁当を作る順番が回ってきて、当時、料理をしたことがほとんどなかった私は、母に弁当作りをお願いし、母の傍らで、母に代わって「なんでこんなことをしなければならなんだ」と不平をもらしていた。

私が通っていた高校は女子校で、社会人のOGたちも時々練習に参加しに来ていた。当然、そのOGらも「監督への弁当作り」をこなしてきた人たちだったが、この慣習が「いつから」「どんな理由で」始まったのか、私は悶々としながらも、誰かに聞いたりその思いを共有することは、母以外なかった。学年が上がりさえすれば「弁当作り」から解放される、ただその一心だった。

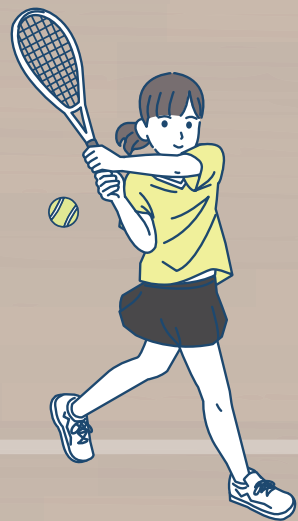
部活動の最も印象深い思い出が、「試合で優勝した！」という汗臭いものではなく、「弁当作り」という女子マネの経験であったというのは、自分でも驚きだ。学校外部から雇われていた監督に、当時、どのくらいの手当が支払われていたのかはわからない。ほぼボランティアに近い状況だったと思う。会社が休みの週末に試合があれば、その試合会場へ赴き、監督としての役割を果たしてくれた。そんな監督にせめて、「弁当作り」で感謝の意を表そうと高校生たちは考え、決めたのかもしれない。かわいじゃないか、料理だって覚えられたではないか……。そんな声も聞かえてきそうだが、はて、もしこの監督が女性であったら先輩たちは「弁当作り」をしていただろうか。

学習指導要領に「学校教育の一環として」位置づけられる部活動ではあるが、これまで部活動の顧問による性差別、暴力などの人権侵害が何件も起きている。「勝つために」「強くなるために」「顧問の行動が「教育の一環」として許容されてきたことが大きな要因だ。時には顧問の体罰による恐怖とともに性的な屈辱に晒されてきた生徒もいる。

部活動の指導の名の下で人権侵害を犯す者が「教育者」「指導者」という立場にいるのは、非常に恐ろしいことだ。しかし奇妙なことに、部活動ではそのような顧問のやり方が、保護者や学校から支持され、矮小化^{わいしょうか}されてしまう傾向にある。部活動が人権侵害の温床になってしまふのは、体罰等を直接行う者のみならず、そのような人物の行為を支える周囲によっても作られ、維持されているということだ。また当然のこととして、人権侵害が許容されている環境では、ジェンダーやセクシュアリティに関わる問題も軽視・無視されやすい。



アメリカ代表女子体操のチームドクターだったラリー・ナサールが、長年にわたって多くの選手たちを性的に虐待し、終身刑になった事件は有名である。この事件の背景には、オリンピックで金メダルを取りさえすれば何をしてもいいという、米国内体操協会の勝利至上主義と人権侵害を許容する組織文化があったとされる。特に体操の女子選手たちは、監督やコーチに従順であるよう若いうちから育てられ、声を上げる力さえ奪われていた。アメリカのこの事例は、日本の部活動を考える上でも重要だ。しばしば体罰をおこなう顧問や指導者ばかりが問題視されるが、体罰が起こってしまう環境を許容する組織文化にも目を向けなければならない。



平成20年から、思考力、判断力、表現力を含む「生きる力」の育成が学習指導要領の中で強調されるようになった。顧問・監督・指導者の言うことを絶対視し、逆らえない環境というのは、自ら考え判断する力を生徒たちから奪い、「生きる力」の育成とは相反する。納得のいかない弁当作りを「伝統だから」と思考停止することもその延長線上にあったのだ。

みんなが心地よく参加できる部活動の環境づくりに必要なのは、ジェンダーの問題も含め、「なんか変だな」と気づくことのできる力、その気づきを共有し、声をあげ、既存の環境を変えていく力と言えるだろう。

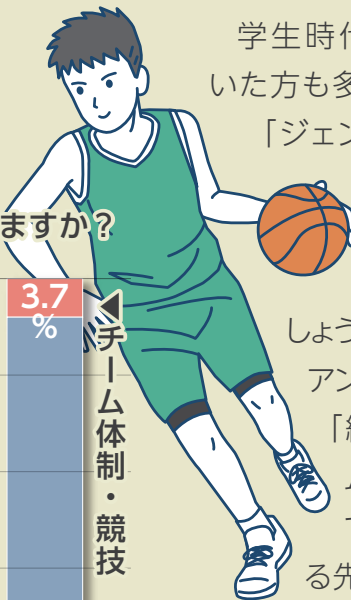


山口理恵子 プロフィール

城西大学経営学部教授 同大学女性人材育成センター所長。日本オリンピック委員会(JOC)アントラージュ専門部会部会員、日本スポーツ協会指導者育成委員会委員であり、日本ボクシング連盟理事も務める。研究テーマは、スポーツとジェンダー・ポリティクス。スポーツ分野における性暴力。

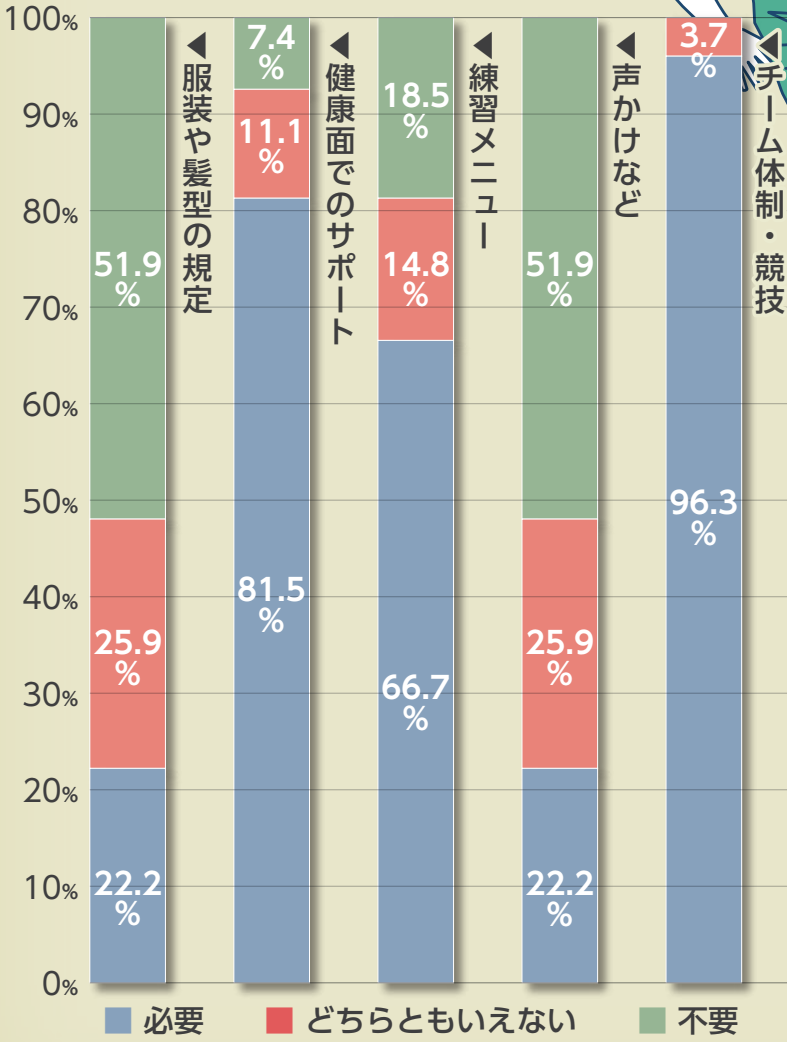
共著『日本代表論』(せりか書房、2020年)、『スポーツとLGBTQ+』(晃洋書房、2022年)など。

学校の部活動から考える ジェンダー

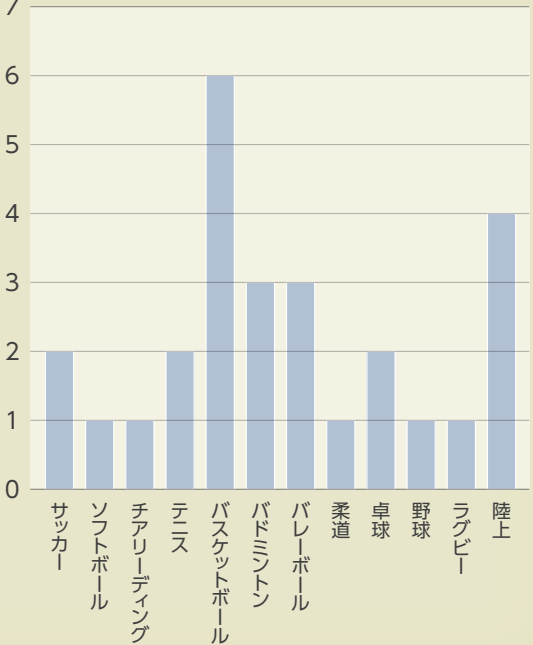


学生時代に「部活動」に所属されていた方も多いのではないのでしょうか？
「ジェンダー平等」「LGBT」などの言葉を聞く機会も増えた昨今、学校の運動部におけるジェンダー課題はあるのでしょうか？今回は札幌市内の高校にアンケートをとり、「服装」「健康面」「練習メニュー」「声かけ」「チーム体制・競技」の違いについて運動部の顧問をされている先生の声を集めてみました。

性別によって区別や異なる対応が必要だと思いますか？



アンケートに回答いただいた方々の部活動の競技種目



声かけの違い

声かけについては性別関係なく平等に行うことが可能であると考える。

女子には特に、マメに声をかけている。女子には頻回の方がよい。

同じ学生なので、差をつけることはない

見た目にルールを設ける必要性をあまり感じない。設けると差別につながるため。

メーカーですでに区別済だから。

服装の違い

種目や部活の種類によっては競技にふさわしい(適切な)服装が必要な場合もあるため。

男子と女子では筋肉量や体力が異なるため、女子の倍の運動量を男子には求めても良いと感じる。

練習メニューの違い

性別による区別というよりは個別の対応が望ましい

チーム体制・競技の違い

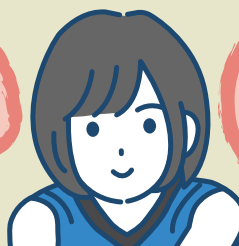
体格、体力差があるので男女別の競技設定には合理性を感じる。一方、ルールを整備したうえで男女混合、ジェンダーを問わないチーム編成があってもいいと思う。

健康面の違い

生理による貧血や鉄分の補給は理解しておくべき。

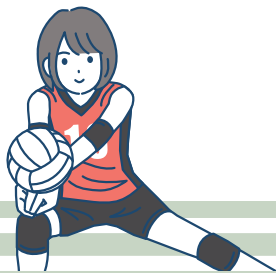
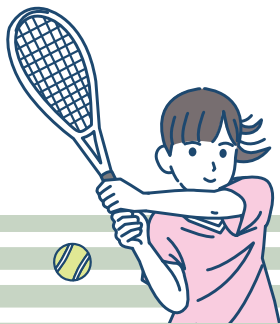
女子の方が体調を崩しがちに思うが、男子を軽視しているわけではない。

■ 必要の声
■ どちらともいえない声
■ 不要の声



その他スポーツにおいて課題に感じるジェンダー課題について

- 身体的な面から仕方ないが、男女で体育の授業や部活を分けると、性別に違和感を感じる生徒は窮屈な思いをしてしまう。なるべく男女で区別しない、もしくは本人に選択させられる環境を与えるべきだと思う。
- 身体は男性、心は女性の生徒が女子部に入部した時、普段の活動は問題なくても対外試合の参加は難しいだろう。男女関係なく試合をするなら男性の方が勝つ可能性は高い。しかしそれは強い男性像の強化に繋がり、男性優位の社会を形成しかねない。そうなると部活動では大会などで優劣をつけるということを辞めた方がいいという考えになるが、それは社会の合意を得られるのだろうか。



アンケートのまとめ

皆さんはアンケートの結果や教員の声をどう感じましたか？
アンケート結果を丁寧に読み取っていきましょう。

アンケート結果をみると、セックス(生物学的性差)に基づく配慮の必要性に気づいている人は多いように感じられました。女子学生の生理期間への配慮の必要性や男女の筋力差・体格差によって練習メニューを変えるなど、身体構造上の男女差に対応するため、実際に配慮しているという声が多かったです。今号でいうジェンダー平等とは、性別に対する偏見に気づき、それをなくすことだけでなく、性別に対して見落としている視点を包括することでもあります。

そういった目線で考えると、「競技に支障が出なければいい」「男女差はあまり気にする必要はないと思う」などの声がありました。部活動においてジェンダーの視点をきちんと持っているかは改めて考えていく必要があるのではないのでしょうか。

〈じゃあ何に気を付ければいいのか？〉

～あなたの部活では左記項目について整備されていますか？～

□髪型や運動着について、合理的ではないルールやジェンダーのステレオタイプを強調する規定はない。

↓坊主でなければいけない、「女子はピンク、男子はブルーのユニフォーム」などの規定がない

□性的視点から守るための配慮をしている

↓ブルマなど体のラインがでる服をユニフォームにしない／女子限定のスカート着用義務付けなどのルールがない／盗撮などへの防犯対策等をしている

□ジェンダーや性について話しやすい雰囲気である

↓生理痛や貧血など、性別にかかわらず監督・部員が理解している／セクハラやパワハラについても学習の機会をつくり、相談窓口の情報を伝えている



学校の部活動から考えるジェンダー

Educational



スポーツとLGBTQ+ シスジェンダー男性優位文化の周縁

岡田桂・山口理恵子・稲葉佳奈子 著
晃洋書房

タイトルには「LGBTQ+」とありますが、性的マイノリティに限らずこれまでスポーツがいかに「男性」のものとしてきたかを紐解き、それに当てはまらない女性やLGBTQ当事者がどのように扱われてきたかを取り上げています。無意識に染みついたイメージから自由になってスポーツがすべての人のためのものになるためのヒントをもらえます。

History



歴史を変えた 50人の女性アスリートたち

レイチェル・イグノトフスキー 著 野中モモ 翻訳
創元社

近代スポーツの歴史を切り拓いてきた女性アスリートにスポットを当て、競技の成績やプライベートなどをポップなイラストとともに紹介しています。様々な競技、国籍、人種のアスリートが取り上げられています。主な漢字にルビも振ってあり、未来のアスリートたちも読みやすい本です。

Movie



オフサイドガールズ

ジャファル・パナヒ 製作・編集・監督
新日本映画社

イランではサッカーは国民的なスポーツだが、女性がスタジアムで男性のスポーツを観戦するのは法律で禁止されている。そんななか開催されるワールドカップ出場をかけた試合をみるために、男装してスタジアムに乗り込む少女たち。「10分に一度はハプニングを起こす」という監督のこだわりによる楽しいエンタテインメント作品でありながら、誰もがスポーツを楽しむ権利はあるというパワフルなメッセージも届けてくれる映画です。

Textbook



女性アスリートの教科書

須永 美歌子 著
主婦の友社

女性特有の健康課題はスポーツ選手とも無関係ではありません。正しい栄養や月経コントロールに関する正しい知識を得て、「無月経」「貧血」「エネルギー不足」などのトラブルを回避しつつ、よりパフォーマンスを上げるための方法を取り上げています。アスリート本人だけでなく、保護者や指導者に読んでほしい一冊です。

り ふ る の ス ス メ

このページではセンター職員がおススメする本をご紹介します。
あなたのお気に入りになったら嬉しいです。

札幌エルプラザ情報センターを知っていますか？

札幌エルプラザ内にある「情報センター」では男女共同参画を含めた4分野の資料を閲覧したり借りたりすることができます(ご利用は無料です)。
マークが付いているものは情報センターで借りることができますので、ぜひ遊びに来てください。

情報センターへのお問い合わせは

011-728-1223

(開館時間 9:00~20:00)
(貸出時間 9:00~19:45)

札幌市男女共同参画センター相談窓口のご案内

札幌市男女共同参画センターでは、女性のための相談窓口を開設しています。相談料は無料で、秘密は固く守ります。
相談内容から浮かび上がった問題は、ジェンダーに関わる課題として市民や行政に投げかけ、男女共同参画社会の実現に生かします。

相談総合窓口

(総合相談)

「どこに相談したら良いか分からない」「相談できる窓口を知りたい」という方、まずはご相談ください。
センターの女性職員がお話を伺いご相談の内容によって相談窓口をご紹介します他、気持ちの整理の
お手伝いをします。 **電話：011-728-1225 (平日9:00～17:00)** ※面談希望の場合は要予約

▼法的な相談をしたい

札幌市男女共同参画センター	日時	相談員	相談方法	相談内容
女性のための 法律相談	第1・3木 18:00～20:00	弁護士 (女性)	面談	・DVや離婚、別居に関わること ・職場や地域等でのセクシュアル・ハラスメントなど ・性別を理由とした不当な扱い、嫌がらせなど 予約受付電話：011-728-1255 ※完全予約制なので事前にお電話でご予約ください。

札幌市では誰もがいきいきと豊かに暮らす「男女共同参画」社会の実現に向けて、小学6年生、中学3年生に向けて冊子を配布しています。家庭でのこと、仕事でのこと、様々な場面で関わる性別による意識に対して、若い世代の人が学ぶことで自分らしく学ぶことを促しています。中学生編ではデートDVについても取り上げられ、自分が自分らしくいるだけではなく、周囲の人がその人らしくあるための行動についても考えるきっかけを提供しています。



札幌市からのメッセージ.. 小中学生へむけて 冊子を配布しています。

編集後記

スポーツ界での性差別やジェンダー問題に対して、「競技とは関係ないことをそんなに騒がないで」という声を耳にしたことがあります。けれども、スポーツとジェンダーは決して無関係ではありません。性別によって求められる成績や振舞い方が違ったり、適切なケアがされずにただ「強さ」を求められ無理をすることで心身を傷つけるのではなく、個人として尊重され安心して競技に取り組める環境を整えていく必要があります。

特に私たちの身近な学校という場所で若い世代の人が周囲の圧力やバイアスによって傷つき、諦めることなく、競技に参加し続けるために大人が何ができるのか、考えてみるきっかけにしたいだければ幸いです。

発行月：令和5年5月

発行：札幌市男女共同参画センター

【指定管理者：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会】

facebook：https://www.facebook.com/pages/札幌市男女共同参画センター/377759212234904

所在地：〒060-0808

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ内

電話：(011)728-1255 FAX：(011)728-1229

ホームページ：https://www.danjyo.sl-plaza.jp

本誌のタイトル「りぶる」は、英語(ripple)で「さざ波」という意味です。男女共同参画の意識がさざ波のように、少しずつ広がって欲しいという想いを込めました。

